



# サ ラ ナ



No.21 長寿寺報 令和2年8月

## より多くの人の幸せを願う

ようやく、梅雨が終わり、夏が感じられるようになってきました。私にとっての夏の始まりは、子供のころからずっと変わらず、「施餓鬼法要」になります。今から二十五年程前、小学生の小坊主が施餓鬼法要で居眠りしていた姿を覚えていらっしゃる方もおられるかもしれません。

この施餓鬼法要の「餓鬼」とは仏教において悪しき行いを重ねた者が死後に生まれ堕ちる三悪趣(三つの悪い境遇)の一つ、餓鬼道の生き物のことです。そして、その餓鬼に飲食をお布施した、つまり、施餓鬼したことで難を逃れたお釈迦様の従者アーナンダ(阿難)の説話が今日の施餓鬼法要が由来となりました。

お布施というと、僧侶の読経に対するお礼を思い浮かべる方が多いでしょうから、餓鬼にお布施するという表現はピンとこないかもしれませんが、お布施はインドのサンスクリット語でダーナ(dānam)といい、英語で寄付を意味するドネーション(donation)や寄付者のドナー(donor)と語源を共有し、お礼(対価)ではなく、「贈与・贈りもの」を意味します。そのため、お布施は僧侶やお寺だけでなく、家族や友人にプレゼントをすること、被災地などへの募金も含まれ、仏教では殊更に重視される行いです。普段の私たちは与えることとは反対に自分の欲しいモノを手に入れ、自分のモノを増やすことを幸せと捉える向きがありますが、欲望には際限がないため真に満たされることはありません。仏教では、その欲望を「渴愛」と呼び煩悩の一つに数えますが、私たちは幸せになるために多くのモノを得ているはずが、実際にはただ渴愛を増幅させているだけなのかもしれません。だからこそ、どこかで方向を転換しなければならず、その転換させる方法こそがお布施の実践です。これを繰り返すことで、自分だけが大切だったものが、自分と身の回りの人々も大切になり、更には見知らぬ人々も大切になってきます。いわば、それまで自分の幸せだけを願っていたものがより多くの人の幸せを願う開けたものになってしまうのです。

先日の豪雨により多くの方々が理不尽にも亡くなられ、久留米や大牟田、人吉など町中が浸水しました。被害に遭われた方々の心中を察すると、居た堪れない思いがします。コロナ禍でボランティアなどが出来ず、出来ることは限られていますが、寄付や募金を通して、是非共に被災地の方々の幸せを祈ることが出来ればと思います。

## ご案内

### 施餓鬼法要

- ◆日時 8月8日午後1時より
- ◆用意 御仏前・霊供膳料

※新型コロナウイルス対策として各地区の世話人各位のみが各地区の檀家代表として参列して頂きます。大変、恐縮ながら世話人以外の檀徒の参列はお控え頂きますようお願いいたします。

### 棚経

- 8月12日 午前10時 黒島
- 午後1時 納島・柳
- 8月13日 午前10時 唐見崎・前方後目
- 午後1時 相津・筒井浦
- 8月14日 午前10時 木場・中村松香丘
- 午後1時 笛吹北・笛吹西1班
- 8月15日 午前10時 笛吹西2班・小浜町
- 午後1時 笛吹南・笛吹東・町外

- ◆用意 お布施(金額随意)

※同配別紙に記載している事情により、棚経は例年のように住職が檀家各位のお宅を回る形ではなく、檀徒の皆さんに本堂にご参拝頂いた上でお勤めさせて頂きたいと思っております。三密を避けるため上記の時間の通りに分けてお勤め致しますので、檀徒の皆さんそれぞれが属している地区のお勤めの時間をご確認頂き、該当の日時にご参拝頂きますようお願いいたします。

ご参拝の際はマスク着用の上、水分補給のための飲料水を各自ご持参下さい。

和尚が読み解く

# 釈迦の ⇄ 生

～prologue2～



## 前回のおさらい

今回は、お釈迦様のお名前にまつわる話をさせて頂きました。悟った人を意味する「ブツダ」から「ブド→ホド→ホトケ」と変化したことや、仏の旧字体である「佛」は中国に仏教が伝来してから創作されたもので、「常人を超えた者」を表すことなどをご説明しました。そして、お釈迦様の本名が、「ゴータマ・シツダッタ」ということです。

## 牛という言葉

「ゴータマ・シツダッタ」はインドの昔の日常語(方言・話し言葉)の一つであるパーリ語という言葉の発音によります。インドは古来よりそれぞれの地域において異なる日常語が用いられ、パーリ語もその中の一つになるのですが現在では使われていない言葉になります。しかし、古い仏典はパーリ語で記されていることが多いため、タイやミャンマーなどの南方仏教では「お釈迦様の用いた言葉」として今もなお神聖視されており、現地ではパーリ語を話すことが出来る僧侶も珍しくありません。もっとも、現在ではお釈迦様の用いていた言葉はパーリ語ではなく、それによく似たマガダ語であったと推定されています。

姓にあたる「ゴータマ」の「ゴー(go)」は牛、「タマ」は優れたと日本語では訳されますが、インドにおいて牛というのは神聖な生き物と目されており、牛が姓に入るということは高貴な家柄を表します。この牛という言葉は先に記した通り、パーリ語では「ゴー(go)」ですが、インドの公用語であるサンスクリット語では、「ガウ(gau)」と発音します。パーリ語もサンスクリット語も同じインドの言語なので似ているのは当然です。では、インドの言語ではない英語では牛は何と言うでしょう。そう、「カウ(cow)」です。それぞれ発音してみると、よく似ていることが分かります。なぜ似ているのでしょうか。それはインド人とヨーロッパ人は祖先が同じだからです。

## インドはバラモン世界

彼らの祖先は、「インド・ヨーロッパ語族」と呼ばれます。このインド・ヨーロッパ語族は白色人種系で、有力な説としては中央アジア(現在のロシア、コーカサス山脈あたり)に住んでいたといわれており、そこから、一つの集団はヨーロッパへ。また別の集団は紀元前



1500年ごろにイラン高原へ。更にそこからインドに移動した集団がいました。このイランとインドに移動した集団を、「アーリア人」と呼びます。長い年月をかけてインドに流入したアーリア人達はやがて定着し、土着のインド人(黄色人種)と共存するようになり、独自の世界観が築かれました。これが現在のヒンズー教に連なるバラモン教です。バラモン教は一宗教の括りに留まらず、インド生活圏に住む人々の世界観でもあります。例えば、生まれ、血統を重んじる厳格な身分制度カーストもそうです。上からバラモン・クシャトリア・ヴァイシャ・シュードラの四階級で構成され、更にはカーストにも入れないチャンダーラと呼ばれる被差別民もいます。これは今日まで続く差別であり、どの身分で生まれるかによって人生が決められてしまうものです。どれだけ才能があろうが努力をしようが、身分が低ければ報われることはありません。また、異なる階級同士の結婚はおろか、触れることすら穢れが伝染するとされて許されません。シツダッタ(悟りに至る前のお釈迦様の名前)さんは上から二番目のクシャトリア階級で、王子という立場であったと伝わります。また、生き物は生まれ変わり死に変わりを繰り返す「輪廻転生」という考え方もバラモン世界の特徴です。シツダッタさんはそういう国で生きていた人なのです。

### 今回のまとめ

英語とインドの言葉は語源が同じ

インド人とヨーロッパ人は共通の祖先を持つ

インドはバラモン教の世界観